



頬つえで内側に倒れてしまった奥歯



上顎の発育不全による反対咬合



舌の動きのくせも影響。上下の歯が開いた例。



下唇をかむ態癖による不正咬合。上下の歯にすぎ間ができています。

# 子供の成長期が重要。ポイント 早期発見で改善しやすく

前歯が前方に突き出る、下の歯が前歯より出るなど悪い形態のかみ合せ「不正咬合(こうごう)」にはさまざまな症例があります。遺伝的原因もありますが、態癖(日常生活のくせ)が大きく関わっているのをご存じですか? 十勝歯科医師会(小林靖会長)の協力で、注意すべきポイントを2回にわたり紹介します。初回は同医師会会員の柳井大正先生に話を聞きました。(Chia編集部)

## 骨格完成後の矯正は大変

「バランスの取れた正しいかみ合わせの実現には基礎つまり子供の成長期が非常に大切」と柳井先生。上顎(じょうがく)と下顎(かがく)の成長ピークはそれぞれ9〜11歳と12〜16歳とされ、顎(あご)の完成前であれば、矯正治療で骨格



成長期のかみ合わせの重要性を説く柳井先生

の修正が図れます。顎骨の適切な成長を阻害する因子の発見は早いほどよく、骨格が完成して問題が大きくなってしまつてからの矯正は、抜歯したり、時には顎(あご)の骨を削るなどの外科的処置が必要で、非常に大掛かりなものとなります。

## 頬づえ、うつ伏せ寝に注意

不正咬合を招く因子の一つが態癖です。口腔内に一定の力が加わることで、かみ合わせに影響します。柳井先生は「代表例が頬づえ。手のひらに載せている方の歯が内側に倒れ、顎がずれたりします。うつ伏せ寝も同様で、同じ側ばかり下にしていると顔面が変形することもあります。添い寝にも注意が必要。子供は母親を向いて寝るものなので、母子の寝る位置をたまに変えるように」とアドバイスします。

## 小さな態癖にも目配りを

下唇や爪のかみぐせも悪影響を及ぼします。前者は唇がテコのような働きをして上下の前歯の間にすぎ間を作り、かみ合わなくなります。後者は歯がすり減り、ひどくなると歯がぐらついて抜けてしまうこともあります。

不良姿勢もぜひ改善したい態癖。体のサイズに合わないテーブルや机で食事をしたり勉強をしたり、ショルダーバッグを同じ肩にばかり掛けたリすることで、背骨がゆがみます。背骨のゆがみは顎のずれを誘発するのです」と注意を促します。

## よくかむ食生活を励行

食事は、他にも気を付けたい点があります。柳

井先生は「顎の適切な成長には舌がバランスよく動くことが不可欠。正しくかむ習慣を身に付けさせて」と強調。食べ物をかんでいるときは口を閉じる、食べ物を水で流し込まない、片側ばかりでかまない、といった子供本人が気を付けることはもちろん、親としても食材を小さく切り過ぎない、やわらかい食べ物ばかり出さないなどの努力が求められます。キシリトール入りガムをかむのは顎骨の成長を助けるので、推奨できるケアの一つ。医療用の固めのガムも販売されています。

## 幅広く影響する不正咬合

不正咬合の原因はさまざまですが、多くは上顎の発育不全によるもの。反対咬合(受け口)につながるばかりか、下顎の発育、鼻や目の機能にまで影響します。「下顎の位置がずれて気道を狭くしたり、眼球をしっかりと支えられずに視力低下を招くこともあります。治療しても鼻炎を繰り返すような場合、上顎の発育不全を疑ってみてほしい」といいます。

柳井先生は「子供の咬合育成の正解は一つではありません。一人ひとりの状況をつぶさに見る必要があります」と語り、虫歯治療だけでなく、掛かり付けの歯科医を定期的に受診し、口腔状態をチェックする重要性を説いています。

# 十勝歯科 医師会

態癖を見直して  
正しいかみ合わせ  
バランスを! ④